World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第78回

極東ロシア　ウラジオストクとハバロフスクを歴史散歩

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

これまで遠い遠い所だと思っていたロシア。ところが、成田空港から僅か２時間で飛んで行けるロシアがあった。『日本に一番近いヨーロッパ』をキャッチフレーズに、今プチブームを起こしているウラジオストクとハバロフスクへ行き、日本との関連を中心とした歴史散歩をしてきたので、その様子を紹介したい。

なお、ロシアはビザの取得が非常に面倒だが、『ウラジオストク、ハバロフスク、サハリンのうち１か所、実質７日以内』であれば、ネット申請により無料でビザが送られてくるという極めて素晴らしい措置が日本人向けに取られている。これは、北方領土問題などとは何の関係もないロシア側の観光振興策であろうが、喜ばしい時代がやってきた。また、従来は入国審査や税関検査にも時間がかかっていたが、これもあっという間に終了。

シベリア鉄道の起点 ウラジオストク

ウラジオストクの街は、港と駅を中心にコンパクトで歩きやすい。駅といえば、ここはシベリア鉄道の東端、起点となるところで、昔は多くの日本人がここまで船で来て、鉄道でヨーロッパへ向かっている。街中には与謝野晶子の碑があり、ヨーロッパに旅立つ心を歌った歌が刻まれていた。ウラジオストクは日本との関連を巡る歴史散歩が興味深い。

この晶子の碑のすぐ近くには本願寺跡の碑もあった。当時の法主大谷光瑞もここに来たという。そして何より、日露戦争前の本願寺は軍の諜報活動拠点としても使われていたようで、僧侶自身が軍人の仮の姿だったとの話もあった。日本人がウラジオストクにやってきたのは、明治初期と思われるが、そこから日中戦争を経て最終的に引き揚げる1937年までの間に、日露戦争など幾多の事変が起こり、政治や国際情勢の波に翻弄されていく。

スヴェトランスカヤ通りを緩やかに下り、アルセーニエフ沿海地方州立博物館という立派な建物（旧横浜正金銀行）の角を曲がると、アレウーツカヤ通りに入る。このアレウーツカヤ通りとオケアンスキー通り（旧キタイスカヤ通り）の辺りには、築100年超の建物がいくつも残っており、これらの建物には、日本人が経営する商店などがたくさん入っていたらしい。さらには、旧日本領事館や旧朝鮮銀行などの建物も残っており、何ともレトロな雰囲気に包まれている。

観光客が一番多いのは、俗に「噴水通り」とも呼ばれるアドミナーラ・フォーキナー通りであろう。確かに、天気の良い日にヨーロッパ風の建物に囲まれた、噴水がある風景には、ベンチに座ってソフトクリームでも食べたい雰囲気になる。だが、実はこの辺りも100年前は日本人が経営する女郎屋が並んでいたと聞くと、「歴史とは何か」と考えさせられ

写真１　ウラジオストク　旧日本領事館

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

る場所でもある。

その他、スヴェトランスカヤ通りを下っていくと、嘉納治五郎の像とともにロシア柔道発祥の地があり、その先には極東ロシア初の高等教育機関で、日本語教育や日本研究も盛んな旧東洋学院、その裏にはロシアバレエが今も観られるプーシキン劇場が姿を現す。ウラジオストクの歴史散歩は２～３日、フラフラと歩いてみるのも面白い。

極東軍事拠点 ハバロフスク

ハバロフスクは、軍事的には極東司令部などが置かれる重要拠点である。ただ、ウラジオストクよりさらにこじんまりとした街であり、空港からトロリーバスにゆったり30分ほど乗ると、中心部のムラビヨフ・アムールスキー通りに出る。この通りを突き抜けるとアムール川に出た。広い川面、その遥か向こう60㎞離れたところには、中国の撫遠という街があり、数年前に行ったことがある。凍結しない半年だけ港が開かれていて、ここからフェリーに乗って中国へ行けるのだ。

川沿いには２つの重要な建物が建っていた。１つは音楽堂。ここは（ここ以外にも隣の極東美術館を含めて幾つもある）戦後抑留された日本人が建てたといわれており、その中には歌手の三波春夫さんもいたという。もうひとつは、士官会館。ここでは1949年にハバロフスク裁判が開かれ、日本が対ソ攻撃や人体実験などを行ったとされる731部隊などが裁かれた歴史的な場所である。

これらのメイン通りとその両側には、歴史的建物が数多く残っている。実際に、ガイドから『ここは竹内商店、向こうは中村歯科医、最初の日本領事館もここにあった』などと聞かされると、ちょっと驚いてしまう。当初の木造建築は殆ど残っていないものの、1900～1920年代に建てられた重厚で立派なレンガ造りの建物は今も現役で使われている。

郊外には日本人墓地もある。区画が仕切られ、かなりきれいに整理されている印象。1956年日本人墓地とあるのは、日ソ共同宣言の年に整備されたということだろうか。近年、日本政府はシベリア抑留中に死亡した人々の遺骨収集をして、DNA 鑑定も行っているというが、本当にその人なのだろうか。名前があり、墓があるというのは遺族にとっては救われるのかもしれないが、地元では以前から疑問の声があがっており、その杜撰な管理が問われているという。

プーシキン像がある教育大学の裏手には、あのラストエンペラーの溥儀が連行され収容された建物もあった。確か、先日天津に行った際、溥儀が故宮を出て住んだ静園にあった展示室に、ハバロフスク抑留のことが書かれていたのを思い出す。この建物の１階に溥儀と満州国の大臣クラスが住み、２階は日本人将校が住んだと説明された。何ともリアルに歴史的な場所に立っている気がした。

従来は、シベリア抑留者やその遺族、戦前この地に居住していた人々の子孫が訪れることが多かった極東シベリアだが、今後は国内旅行並みの時間で行ける手軽な外国となるのだろうか。

写真２　ハバロフスク　日本人墓地